

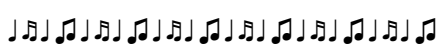
西暦(年齢)	主な出来事	主な作曲
1806 (35)	・弟カスバル・カールがベートーヴェンの反対を押し切ってヨハンナ・ライスと結婚。カールとの関係が悪化。 ・カスバル・カールの息子カール生まれる。	ピアノ協奏曲第4番作品58／弦楽四重奏曲第7－第9番《ラズモフスキー》作品59／交響曲第4番作品60／他
1808 (37)	・弟ニコラウス・ヨハンが薬局を買収しリンツに移る。 ・ハイドン 76歳の誕生日を祝う演奏会(ハイドン《天地創造》の公演)に聴衆として出席する。	交響曲第5番《運命》作品67／交響曲第6番《田園》作品68／チェロ・ソナタ第3番作品69／他
1809 (38)	・不和だった弟カールと和解する。 ・ハイドン没	弦楽四重奏曲第10番《ハーブ》作品74／他
1810 (39)	・《ゲーテの悲劇『エグモント』のための音楽》作品84が完成、ブルク劇場で演奏される。 ・交響曲第5番について、E. E. A. ホフマンによる長文の批評が『総合音楽新聞』に掲載される。	ピアノ協奏曲第5番《皇帝》作品73／《悲劇『エグモント』のための音楽》作品84／歌曲《ゲーテによる3つの歌》作品83／バガテル《エリーゼのために》Wo059／他
1811 (40)	・《『エグモント』のための音楽》をゲーテに献呈 ・新国立劇場柿落しのための作曲を依頼される。	《祝典劇『アテネの廃墟』のための音楽》作品113／《祝典劇『シュテファン王』のための音楽》作品117／他
1812 (41)	・ペストの新国立劇場柿落しで《シュテファン王》《アテネの廃墟》が初演され、大成功を収める。 ・ピアノ協奏曲第5番《皇帝》がチェルニーによってウィーンで初めて演奏される。 ・「不滅の恋人」への手紙を執筆する。 ・テプリツでゲーテと初めて会う。	交響曲第7番作品92／交響曲第8番作品93／ヴァイオリン・ソナタ第10番作品96／3つのエクアール Wo030／アレグレット Wo039／他
1813 (42)	・メルツェルから自動演奏機「パンハルモニコン」のために、ウェリントン将軍の勝利を讃える音楽の作曲を依頼される。	《ウェリントンの勝利またはヴィットリアの戦い(戦争交響曲)》作品91／他
1814 (43)	・《ウェリントンの勝利》の権利をめぐる不仲であったメルツェルがミュンヘンでこの曲を演奏したことを聞いたベートーヴェンは告訴する。	《フィデリオ》作品72／ポロネーズハ長調作品89／ピアノ・ソナタ第27番作品90／他
1815 (44)	・弟カールが死去。遺言によりベートーヴェンは未亡人ヨハンナとともに遺児カールの共同後見人となる。 ・ウィーン市より「名誉市民」の称号を授与される。 ・遺言をめぐるベートーヴェンはヨハンナを後見人から外すよう上級(貴族)裁判所に上訴。	歌曲《希望に寄せて》作品94／二重唱《メルケンシュタイン》作品100／チェロ・ソナタ第4、第5番作品102／カンタータ《静かな海と幸運な航海》作品112／他
1816 (45)	・上級(貴族)裁判所によって甥カールの単独後見人と裁定される。	歌曲《遙かなる恋人に》作品98／歌曲《約束を守る男》作品99／他
1817 (46)	・メルツェルと《ウェリントンの勝利》をめぐる争いの裁判費用を折半することで和解成立。 ・『一般音楽新聞』にメルツェル考案のメトロノームによる、交響曲8曲の速度表示一覧を掲載。	弦楽五重奏のためのフーガ作品137／《修道僧の歌》Wo0104／23の諸国民謡 Wo0158a／7つのイギリス民謡 Wo0158b
1818 (47)	・甥カールを寄宿学校から退学させ、一緒に暮らす。 ・難聴が深刻になり筆談帳を使い始める。 ・カール、ギムナジウムに入学するも母親の元に出奔、ベートーヴェンは警察権力を借りて連れ戻すが、母親ヨハンナはこれを上級裁判所に訴える。 ・ベートーヴェンが貴族出身でないことを理由にカールの裁判は下級(平民)裁判所に移す通達が出される。	ピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》作品106／25のスコットランド民謡作品108
1819 (48)	・平民裁判所でベートーヴェンのカールの後見権はく奪の裁定。後日異議申し立てをするも却下される。 ・ライバッハ(現ユーゴのリュブリャナ)フィルハーモニー協会から名誉会員証明書が届く。	6つの民謡主題と変奏曲作品105／10の民謡主題と変奏曲作品107／合唱曲《婚礼の歌》Wo0105／12のスコットランド民謡 Wo0156

西暦(年齢)	主な出来事	主な作曲
1820 (49)	<ul style="list-style-type: none"> ・カールの後見について共同後見を申請された控訴審裁判所はベートーヴェンの申請を受理し、カールの後見を認め、共同後見人として宮廷顧問官のカール・ペーターズを選任する。 ・ヨハンナによるカールの後見権主張の嘆願書が却下され、長い裁判闘争を終える。 	ピアノ・ソナタ第 30 番作品 109 / 歌曲《ぼくを忘れないで》Wo0130 / 歌曲《星空の下の夕べの歌》Wo0150 / 12 の諸国民謡 Wo0157 / 6 つの諸国民謡 Wo0158c
1821 (50)	<ul style="list-style-type: none"> ・黄疸症状がひどくなり回復にかなりの日数がかかる。 	アレグレット Wo061
1822 (51)	<ul style="list-style-type: none"> ・シュタイアーマルク音楽協会名誉会員推挙の通知。 ・最後のピアノ・ソナタ第 32 番作品 111 完成。この数日後に作品 110 の終楽章改訂が終了して完成。 	ピアノ・ソナタ第 31 番作品 110 / ピアノ・ソナタ第 32 番作品 111 / 11 のバガテル作品 119 / 他
1823 (52)	<ul style="list-style-type: none"> ・スウェーデン王立アカデミーの外国人名誉会員に推挙される。 ・甥カールがウィーン大学に入学する。 	《ディアベッリのワルツによる 33 の変奏曲》作品 120 / 《ミサ・ソレムニス》作品 123 / 他
1824 (53)	<ul style="list-style-type: none"> ・交響曲第 9 番作品 125 最終的に完成。 ・《献堂式》序曲、交響曲第 9 番および《ミサ・ソレムニス》抜粋がウィーンで初演される。 	交響曲第 9 番《合唱》作品 125 / 6 つのバガテル作品 126 / ワルツ Wo084
1825 (54)	<ul style="list-style-type: none"> ・ロンドンで交響曲第 9 番が初演される。 ・体調を崩し、ひと月近く病臥する。 ・甥カールが大学を中退し、実業学校に入学する。 ・カールが母親と会っていたことを叱責・非難することでベートーヴェン自らも精神的に追い込まれる。 ・ウィーン楽友協会理事会はベートーヴェンの名誉会員への推挙を決議する。 	弦楽四重奏曲第 12 番作品 127 / 弦楽四重奏曲第 15 番作品 132 / アレグレット・クアージ・アンダンテ Wo061a / ワルツ Wo085 / エコセーズ Wo086
1826 (55)	<ul style="list-style-type: none"> ・再度腹部疾患で病臥することになり病気がちの日々を送る ・弦楽四重奏曲作品 130 がシュパンツィク四重奏団により公開初演されるが、終楽章の《大フーガ》の難解さと演奏の拙さで大失敗となる。 ・甥カールがピストル自殺を図り頭部を負傷して母親の元に送られる。 ・退院したカールとベートーヴェンはグナイクセンドルフの弟ヨハンの屋敷に滞在。 ・ウィーンへの帰路に風邪から肺炎性の発熱。ウィーン帰着後容体悪化。 ・謎カノン《われらはみな迷うもの》Wo0198 を作曲(最後の完成作品)。 ・シュパンツィク四重奏団によって「新しい終楽章付き」の作品 130 が私的初演されるがベートーヴェンは立ち会えず。 ・容体が急変、悪化する。 	弦楽四重奏曲第 13 番作品 130 / 《大フーガ》作品 133 / 弦楽四重奏曲第 14 番作品 131 / 弦楽四重奏曲第 16 番作品 135
1827 (56)	<ul style="list-style-type: none"> ・甥カールが軍隊入隊のためにウィーンを出発する。 ・遺言状を認め遺産相続人を甥カールとする。 ・ロンドンのフィルハーモニーへの見舞金受領の感謝の手紙をシンドラーに口述筆記させる(最後の手紙) ・3月 26 日午後 5 時 45 分ごろ臨終。 	

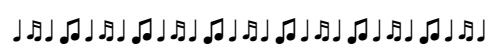
『別冊解説書 ベートーヴェン全集;10 別冊 資料編 年譜 / 作品表 他』(請求記号 CDO2 / へーと)

『ベートーヴェン事典 全作品解説事典』(請求記号 762.34/102 相談室 常置)

より作成



鑑賞曲紹介



交響曲第9番二短調「合唱付」(1824年完成)

鑑賞LP

・フルトヴェングラー指揮

バイロイト祝祭管弦楽団・合唱団

エリザベート・シュワルツコップ(S)、エリザベート・ヘンゲル(A)、ハンス・ホップ(T)、

オットー・エーデルマン(Bs)

1951年録音(バイロイト音楽祭) AA-93001B Angel Records 東芝EMI

(請求記号 CLP11/1197/1529 資料番号 42045831 書庫)

・“フルトヴェングラーの芸術”第3期第3集—ユニコーンシリーズ—

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ブルーノ・キッテル合唱団、ティラ・ブリーム(S)、エリザベート・

ヘンゲン(A)、ペーター・アンダース(T)、ルドルフ・ヴァツケ(B)

1942年録音 WF-70004~5 Angel Records 東芝EMI

(請求記号 CLP11/716/1225 資料番号 42036491 書庫)

「1792年以来ベートーヴェンはシラーの《歓喜に寄す》に心酔しており1817年には声楽を取り入れたオーケストラ作品のスケッチを書いている。しかしその後、この交響曲の執筆が進む過程で、声によるフィナーレを断念した。それが1823年の終りになって、ようやく総合がなされる。《歓喜に寄す》は1824年5月7日に公演されたこの作品の最後を飾るべく用いられる。この曲の最初の3楽章は、そのそれぞれを思い起こさせる導入部によって、最後の楽章としっかりと関連付けられている。それゆえに《歓喜の主題》はここで控えめに登場し、低音の弦楽器で非常にソフトに歌われる。そして、次第に広がり始めるのである。

この主題は、あらゆる音楽のうちで最も広く世界中に知られているものだが、まさに、作曲者のたゆまぬ探求の結果として得られたのである。この主題の200以上の状態が知られているほどだ。ベートーヴェンは多くの作品においては、膨大な量のスケッチの中から、ひとつの主題の発展に最も適したく母体となる状態を追求してきた。それがこの作品においては反対に、変化を受けることもなければ自分から変化することも無い、無数の歌によってもたらされるく恒久の理想的状態を求めたのである。

したがってフィナーレのく展開部は、実際には全く展開ではなく、同じものの拡大であり、ある理念の賛美、呪文なのである。それゆえに、このフィナーレは演奏会のホールを超越して、頌歌という運命をまとうこととなった。」

『ラールス 世界音楽事典 [下]』福武書店 1989 (請求記号 760.33/1/2 相談室 常置)



バイロイト音楽祭



「バイロイト音楽祭(独:Bayreuther Festspiele)はワーグナーの作品の上演を目的として、バイロイトの祝祭劇場で行われる音楽祭。ワーグナーは、総合芸術としての彼の楽劇上演の理想を実現させるため、それにふさわしい新しい劇場の建設を計画し、バイエルン国王ルートヴィヒ2世の援助のもとに、自らの設計プランにもとづいた祝祭劇場を建設した。

(中略)

ワーグナーの死後も、妻コージマらが遺志を継ぎ、音楽祭は続けられ、ワーグナー上演の中心地となった。

この音楽祭には、欧米各地のすぐれた指揮者、歌手が参加している。(後略)」

『新訂 標準 音楽辞典 トーワ 第二版』音楽之友社 2008(請求記号 760.33/10A/2 相談室 常置)

回想録・書簡集

- ・『ベートーヴェンの思い出』 ゲルハルト・フォン・ブロイニング著 小柳達男、小柳篤子訳 音楽之友社 1973 (762.4D/68 書庫)
著者はベートーヴェンの親友の子息として幼少期にベートーヴェンと親しく過ごした。著者がベートーヴェンと祖母や父、自分自身との関係をまとめた小冊子の記述に訳者が解説をつけた。
- ・『新編 ベートーヴェンの手紙 上・下』 小松雄一郎編訳 岩波書店(岩波文庫) 1982 (イ76/ベ/1~2 書庫)
下巻に解説として、ベートーヴェンの作品が一貫して発展していく、内的な音楽的關係をボン時代に彼の音楽が形成されていく特殊な条件とあわせて記述している。下巻巻末に作品索引、人名作品、作品年譜がある。
- ・『ベートーヴェン書簡選集 上・下』 小松雄一郎訳編 音楽之友社 1978・1979 (762.4J/100/1~2 書庫)
手紙の書かれた年ごとに解説をつけている。上巻の巻末に作品索引と人名索引を、下巻の巻末に人名索引と作品年譜がある。

作品解説

- ・『ベートーヴェンの第9交響曲 分析・演奏・文献』 ハインリヒ・シエンカー著 西田紘子、沼口隆訳 音楽之友社 2010 (764.31/15)
「第9」全 4 楽章の楽曲構造を探求した、優れた楽曲分析書。具体的な演奏の手引きと当時の代表的な文献への批判も充実。著者は1935年ウィーンで没した音楽著述家。
- ・『＜第九＞誕生 1824年のヨーロッパ』 ハーヴェイ・サックス著 後藤菜穂子訳 春秋社 2013 (764.31/21)
著者は、音楽研究者、ジャーナリスト。トスカニーニ、ルービンシュタインといった20世紀の著名演奏者に関する著書がある。カーティス音楽院で教鞭をとる。作品成立の背景を、当時の政治状況と同時代の詩人、芸術家たちの証言から読み解き、作品に込められたメッセージを探る。
- ・『ベートーヴェンの『第九交響曲』 <国歌>の政治史』 エステバン・ブッフ著 湯浅史、土屋良二訳 鳥影社 2004 (764.31PP/5)
第一部で政治社会を反映した「近代政治音楽」の誕生から「第九」に至るまでの思想的・歴史的過程を明らかにし、第二部では「第九」の政治的需要に焦点があてられ、「第九」及びベートーヴェンと後世との関係が個々の事例をもとに検討される。
- ・『第九 ベートーヴェン最大の交響曲の神話』 中川右介著 幻冬舎 2011 (764.31/17)
欧米で神聖視され、歴史的意義の深い日に演奏されてきた「第九」は、時には祝祭、時には鎮魂、時には権力者の音楽、時には労働者の音楽と、他に類を見ない異質で巨大な作品といえる。「第九」がこれまでの200年間にどのような存在だったかを描き出す。

雑誌記事 (雑誌は館内閲覧のみのご利用です)

- ・「特集2 いま聴きたい! ベートーヴェンの協奏曲」『音楽の友』2012年4月号/p69-p81/音楽之友社 (Z760.5/2 書庫)
- ・「特集 ベートーヴェンを歩く」『音楽の友』2012年12月号/p49-p72/音楽之友社 (Z760.5/2 書庫)
- ・「特集 ベートーヴェンの交響曲はいま」『レコード芸術』2012年4月号/p19-p52/音楽之友社 (Z769/13 書庫)
- ・「特集 21世紀に生きるベートーヴェン」『音楽の友』2006年12月号/p65-p98/音楽之友社 (Z760.5/2 書庫)